

**2 (2) その他、特筆すべき教育・研究・診療・社会貢献活動等への取組と成果、世界的位置付けなど。(※評価年次報告「卓越した教育研究大学へ向けて」で報告する内容)****特筆すべき教育活動**

国内外の学会における口頭発表や学術誌への論文投稿に必要な外国語（英語やドイツ語、フランス語だけでなく、外国人留学生にとっての外国語である日本語を含む）の運用能力を高めるためのプログラムの検討作業は平成16年度に始まるが、その結果をうけて、平成18年度から、そのようなプログラムとして、いずれも口頭発表の技術及び論文作成法を指導するための演習形式の授業科目で、主に日本人学生を対象とする「研究のための英語スキル」と原則として外国人留学生を対象とする「研究のための日本語スキル」を共通科目中に新設し、平成19年度には、一層の充実・改善を図った。これらの科目を開設した平成18年度に国内外の学会において口頭発表をした学生又は学術誌に論文を投稿した学生の数は、開設前と比べて一段と増加したが、その傾向は平成19年度においても維持されている。加えて、平成15年度には10件（授与率21%）であった課程博士の取得数は平成19年度には18件（授与率27%）と大幅に増加している。これらは、前記科目の開設目的に相応した成果である。

**特筆すべき研究活動**

本研究科では人文・社会科学、自然科学及び言語科学の諸分野において伝統的な概念や方法論の枠組みを超えた総合的・学際的な研究を推進しているが、本研究科を中心に組織された21世紀COEプログラム「言語認知総合科学戦略研究教育拠点」（平成14～18年度）は、fMRI（機能的核磁気共鳴画像法）装置による脳機能画像の分析を通して言語行為中の脳活動を分析し、脳の言語機能を解明しようとするもので、今世紀の日本の学術研究史上特筆すべき新研究分野の先陣を担う教育研究組織として、優秀な若手研究者を輩出するとともに、脳機能に関する多くの発見をもたらし、特に能動文・受動文やかき混ぜ語順文等の統語構文の脳内言語処理過程の違い、第二言語と母語の類型的近さ・速さと脳内言語処理過程理解の相互関係等に関する研究では世界的な注目を浴びる等、大きな学術的成果を収めている。

**特筆すべき社会貢献活動等**

平成16年度、仙台市のシティセールス政策に呼応して、国際文化研究科と仙台市総合政策部との間で国際交流相互支援に向けて提携・協力をするための「覚書」を取り交わした。これにより、国際文化研究科が仙台市を舞台とする国際交流活動に恒常的かつ積極的に関わる基礎が築かれた。とくに、仙台市とその国際姉妹都市であるフランスのレンヌ市の交流については、平成16年11月に、仙台市公式訪問団と国際文化研究科代表団との合同によるフランス訪問を実施し、レンヌにおいてはレンヌ市及びレンヌ第2大学を、パリにおいてはフランス外務省を、合同で訪問した。その成果として、仙台市とレンヌ市との国際姉妹都市締結40周年を記念して行なう「2007仙台におけるフランス・レンヌ年」事業計画の具体化に国際文化研究科が寄与すると同時に、同事業の実行委員会にも国際文化研究科教員が加わり、仙台市との連携のもとで種々の国際交流行事を遂行し、仙台市における国際交流活動の促進に多大な貢献をした。また、同事業の一環としての仙台市とレンヌ市間の青少年交流行事に際しては、国際文化研究科教員が事前研修講師やコーディネーターとして協力した。

また、この事業との連携として在日フランス大使館から国際文化研究科への提案に基づき、駐日

フランス公使クリストフ・プノ氏を国際文化研究科にお招きし、市民公開の講演会「欧州連合-フランスからの視点」を実施した（平成19年6月5日）。この行事の実施に際しては、仙台市、（財）仙台国際交流協会、仙台日仏協会・アリアンス・フランセーズとの共催とし、仙台市副市長、在仙台フランス名誉領事を初めとする関係者とともにフランス公使をお迎えし、事前協議や歓迎会等も含めて、仙台市と国際文化研究科とが協力して、国際交流の実をあげた。

その他、国際文化研究科の学生や外国人留学生が、仙台市交流政策課や（財）仙台国際交流協会の活動に非常勤ないしはボランティアとして恒常的に関わり、仙台市の国際交流活動に大いに貢献した。